

令和7年度 第1回 北九州市立美術館協議会議事録（要旨）

名称 令和7年度 第1回北九州市立美術館協議会

報告

報告1 令和6年度事業実施結果について

報告2 美術館友の会の活動状況について

議事

議題1 北九州市立美術館運営評価について

開催日時

令和7年8月26日（火） 14時～16時

開催場所

北九州市立美術館本館 アネックスレクチャールーム

出席者

（会 長）菅 章	美術評論家（前大分市立美術館館長）
（副会長）森山 秀子	久留米市美術館副館長
（委 員）林 光孝	北九州市立湯川中学校校長
外山 典子	八幡東区役所保健福祉課教育相談担当係長 （前北九州市立藤木小学校校長）
松崎 功二	福岡県立八幡中央高等学校 教諭
原田 美紀	原田・川原法律事務所弁護士 北九州市立美術館友の会代表幹事
三上 和子	北九州市女性団体連絡会議
大久保 大助	NPO法人KID's work 代表理事
桑園 英俊	社会福祉法人桑の実会 理事長
速水 豊	三重県立美術館 館長
門田 彩	北九州市立大学文学部准教授
立石 洋子	北九州美術家連盟
筒井 卓也	西日本新聞社企画事業室事業部長
梅林 繁喜	北九州商工会議所 総務課長
海上 尚美	市民委員
（事務局）後小路 雅弘	北九州市立美術館 館長
上田 伸一	北九州市立美術館 副館長
三宅 智美	北九州市立美術館 普及課長
那須 孝幸	北九州市立美術館 学芸課長

谷川	昌子	北九州市立美術館	普及係長
重松	知美	北九州市立美術館	学芸係長
三浦	寿一	北九州市立美術館	普及課
奥田	亜希子	北九州市立美術館	学芸課

議事録（要旨）

事務局	議事の説明、傍聴者の確認（２名）、館長挨拶、会長挨拶
報告１「令和６年度事業実施結果について」 報告２「美術館友の会の活動状況について」	
事務局	報告１・２についての説明
議題１「北九州市立美術館運営評価について」	
事務局	議題１についての説明
会長	ただいまの説明についての意見・質問等はあるか。
委員	展覧会事業に関しても、本当に色々なバリエーションに富んだものをしていて、この館ならではの個性的なものもある。企画展だけではなく、コレクション展も様々に工夫をされていて、非常に高く評価できるが、展覧会活動以外の部分が、展覧会に比べるとあまり精力が注がれてないように感じる。これはスタッフ、経費が十分ではないので、仕方のない部分もあると思うが、例えば、作品購入、作品の修復、データベース、調査研究、いずれも非常に持続的に努力しているのは非常に理解できるが、展示活動と比べると少ないのではないかと感じる。
事務局	ご指摘のとおり、予算的な制限、それから調査研究に充てる時間的な余裕のなさから来ているところである。調査研究があつてこそその展覧会の成果でもあるため、その部分に関しては積極的に取り組んでいる。また、近年では助成金を積極的に活用して、それを調査費に充て、展覧会とは別に所蔵作家のアーカイブについての調査研究を行っている。限られた予算ではあるが、助成金を活用しながら取り組んでいる。
委員	決算のところで、美術資料収集と保存関係の経費がおよそ３６０万ぐらいだという報告があつたが、令和６年度では１０点の作品を購入していて、残り全てというわけではないと思うが、修復費用にどれぐらい予算として当てられているのかが気になる。北九州市立美術館は非常にコレクションが充実しており、その維持のためにもコレクションをある程度修復していくということは非常に大事なので、少ない予算の中で、どれぐらいの割合が修復費に充てられているのか教えてほしい。
事務局	昨年度は、作品そのものを修復しておらず、大型版画作品の作品保護のために額装を行った事例がある。傾向としては、作品の修復費は１００万に満たない状況がずっと続いており、大規模な修復はとてもしる予算規模ではない。最小限のことをしながら、展覧会に出品予定のものを優先するとか、その都度優先順位を検討し直しながら対策を取っている。収集予算も、ずっと付いていない状態で基金を取り崩しているの、必要なものだけを最小限で買っている。購入を停止すると、作品の購入情報が入りづらくなるので、購入する意思は、世間に示しながらできる範囲でという形でおこなっている。非常に苦しい中でやっているため、明確にこの予算規模でこの割合であるという言い方はできない。
会長	修復修繕しなければいけない作品リストみたいなのがあり、修繕する順位が

	示されているのか、あるいは展覧会が近いものから修復していくのか。
事務局	作品の傷み具合や修復が必要なもののリストは10年以上前に作っているが、その中で修復できたものが非常に少ないため、そのリストが今でも生きている。新規で入ってくる作品は、できるだけ修復を行ってから納入するなどの工夫をしているが、リストに対してなかなか修復が追いついていない。作品を公開するとか、あるいは貸出をするとかそのような機会に修復するとか、また基金の状況に照らし合わせて順位が上がっていくという状況である。ただし、燻蒸を行っているので、劣化が進んでいくという状況は免れていると考える。
会長	作品というのはメンテナンスフリーではなく、どんどん劣化して悪くなったり、もう既にダメージがあったりするものがたくさんある。その中でなんとかやりくりをしていくという難しさがある。作品の状態が悪いため予算の要望をしても、なかなか予算が見つからないという厳しさがあると思う。収集に関しても同様である。
副会長	大コレクション展が非常に良かったと思う。タイトルも良く、自分のところのコレクションだけで、これだけの面白い企画ができ、集客があったのはとても素晴らしかったと思う。そういう企画ができる美術館なので、見えないところの仕事も絶対できるはずであるため、ぜひ頑張ってもらいたいと思う。これだけのコレクションがあるので、専任の人がいてもいいのではないかなと思うくらいではある。
会長	海外の話をしてもしょうがないが、レジストラーとかコンサバターとか、専門家がいて、また基金や資金を集めるシステムがある。そういうファンデーションであれば、いろんなことができるが、行政の中ではどうしても限られた状況になると思う。そういった中でも、しっかりやっているということは素晴らしいことだと思うし、努力を継続してほしいと思っている。ほかに意見はないか。
委員	オンライン・ミュージアム・ツアーの試みは評価できるが、現場の具体的な反応や評価が気になる。
事務局	アンケート結果に関しては8、9割くらいの方が参加してよかったと、いずれも美術館に興味を持ったというような意見があり、試行に関しては、高い評価をもらっている。子供たちも楽しんで参加をしている状況である。一部の教員はオンラインの接続等で苦慮されていたが、オンラインでも面白いことができると感じてもらっていると思う。ただ、実際に行ってみたかったという、意見もアンケートには見られた。
委員	私の学校で実際にオンライン・ミュージアム・ツアーとして、私が5年生の子どもたちと一緒に授業をしたが、先生たちの本音から言えば、ミュージアム・ツアーが全くなくなるよりもあった方がまだいい。そして、全く触れないというよりも、こういう形でも触れられる方が良いと言ったところが本音である。 また、美術館の学芸員が学校に来て、レプリカでいいから、いくつか作品を持ってきてもらって、まずは、作品の大きさからでも、小学生が勉強できたらい良いという意見がかなりあった。あの後、20校ほどの学校で試行したが、や

	はり同じような先生方の意見があった。オンライン・ミュージアム・ツアーは本当に限られた予算の中でよくやっているが、ないよりもあった方が良いというのが本音である。 もう一つ、市が作った北九州市文化芸術推進プランというのがあるが、この中には市長の意見があって稼げる街の実現ということで、ポップカルチャーの方にかなり重きを置いた意見があるが、逆に今こそ美術館の底力を見せてやるのが大事なのではないかと私は思う。漫画だけが北九州の文化ではない、ポップカルチャーだけではないんだぞ、という北九州市の底力を見せていただければいいと思う。 それから大コレクション展は思ったよりも来館者数が少ないなと思った。5万人以上来るのではないかと思っていた。というのも、美術館に来た時に来館者からの評価が高かったからである。せっかく良い作品を持っているので、みんなで学校も巻き込んで頑張っていけたら、美術館に振り向いてもらえるのではないかと。そして美術館が稼げるんだというところに持っていけたらいいなと考えている。
会長	それから、オンライン・ミュージアム・ツアーとミュージアム・ツアーについては、デジタルという形でもいろんな鑑賞ができるということがあると同時に、やはり本物を見る重要さというのは外せない。その辺のバランスをとるのは難しい。だから一つのきっかけとしてオンラインを使って注目というか知ってもらい、実際来てもらうのが一番いいと思う。その辺りのバランスも含めて、今後、美術館の方でもいろんな形で練られているのではないかなと思う。
事務局	令和5年度に新しい市長になり、その年度に事業棚卸というような形で、今まであった事業をすべて一から見直していく動きがあった。その中で、ミュージアム・ツアーの廃止というのが上がった。これは子供たちが実際に美術館に足を運んで行くということで、美術館側で予算を立てて、各学校から来てもらい、ガイドをつけて、1時間程を共有するという取り組みだったが、美術館のミュージアム・ツアーだけではなくて、平和の町ミュージアムのツアーとか、そういった子どもたちを直接現場に連れて行くような事業が軒並み、事業棚卸の対象に上がっていた。令和6年度が始まり、美術館としてはそれに代わるというわけではないが、違う見せ方ということで、オンライン・ミュージアム・ツアーを構築した。令和6年度の後半にできあがったため、試行の学校が20校。それでも1,000人ぐらいの生徒さんには試行してもらったが、その期間にもやはり市議会の方から、体験を奪うのはいかなものかというような意見があり、令和6年9月議会あたりから、その意見がかなり重くなってきた。令和7年度の事業として、教育委員会の方で「たいけん・まなび充実大作戦」という各学校に行先を任せ、市内にあるような施設を回っていくというような組み立てに代わっている。アラカルト方式と言って、今までは1箇所だけ行って帰るだけだったが、1日の工程の中であれを見て、これを見てというようなことが可能になるということで、令和7年度に始まった。まだ統計的なものが取れていないが、実際にそれで美術館に来て、ミュージアム・ツアーとして復活している学校がどのくらいあるのかと言われると、件数としては4、5件と

	いうことで少ない状況である。一方、オンライン・ミュージアム・ツアーは今年、本格実施ということで、予定は市内１３５校中１００校を超えている。これはこれでだんだん根付きつつあるのかなと思っている。私たちとしては、導入ということでオンライン・ミュージアム・ツアーを最初に見ていただき、その後、『たいけん・まなび充実大作戦』で美術館を選択していただく学校が増えていくということを望んでいる。新しい取り組みを始めて１～２年目のため、継続して高めていく取り組みが必要だと思っている。
会長	非常に悩ましいところもあるが、まずはオンライン・ミュージアム・ツアーをしっかりとやりながら、次に繋がっていくと。体験の方はまた体験で、必要性・重要性というのはしっかりと抑えた上で今後の対応というのを考えていくということだと思う。他に何かあるだろうか。
委員	ミュージアム・ツアーをオンラインのできるのであれば、中学生美術鑑賞教室もオンラインで可能かどうかを検討してもらいたい。要はオンライン・ミュージアム・ツアーの中学生版である。門司区や八幡西区は、美術館に来るだけでものすごい時間かかってしまうので、気軽に鑑賞できたら、協力者を得ながら、授業づくりができるかなと考えている。その際は、単なる作品の紹介で終わるのではなく、美術館という場・空間、それを疑似体験のような形にしてもらえるとありがたい。ただ、美術館の方の協力がいるので、軽々しくは言えない。まず作品、そして本市の美術館に興味をもってもらい、足を運んでみようかという形に持っていけたらありがたいなと思う。
委員	美術館に来るということは大事なことである。今度開催される黒田征太郎展に、何校かだけでも実際に来ていただいて、それが全国に配信されたら北九州頑張っているじゃないかということで、またそうなるとミュージアム・ツアーの話も変わってくるのかなというふうに思っている。
事務局	オンライン・ミュージアム・ツアーでは１階のエントランス、それから３階のコレクション室の中の作品が見られるＡＲ、それから一つの作品を学校のタブレットで実際に拡大したり、小さくしたりしながら、この絵からどんな物語が想像できるかというようなことを、質問していろんな意見を言ってもらう、それに対して討議をするという構成になっている。そういったものに関しては、美術館側がやるよりも教員の先生にやってもらった方が子供たちのこともよくわかっているため、デジタルのコンテンツを貸与して、学校で先生たちにやっていただけると非常に嬉しいと思う。誰でもできるものを事業構成として作ったつもりなので、小学校でも中学校でも先生がご活用いただけるのであればできますし、またオンラインでやりたいといえ、スケジュール的な問題はあるが、中学校でも十分使用することが可能なコンテンツと思っている。それについては今後も教育委員会とも相談して拡大していけたら、美術館としてはコンテンツの作りがいがあるし、美術関連の先生方にはぜひご活用いただきたいなと思っているところである。 同じように、レプリカも触っていいようなものを何点か作ったので、それも見えていただけたらと思う。ただ、学芸員が全てのところに行くというのは現実的でないので、そうした貸し出しを活用していただきたい。ミュージアム・ツア

	一は確かに素晴らしいことだと思う事業で、やめたことに関して、もったいないと思ってくれた先生が多くいたことは去年、本当にしみじみと分かったところであるが、１００校以上を対象としてオンライン・ミュージアム・ツアー事業構築をしているところは、全国に見てもこれが初めての取り組みではないかというふうに思っている。この事業を継続しながら、教育委員会の事業と組み合わせ、美術館にも来てもらうということを両輪でやっていけたらと考えている。
会長	学校と美術館の連携ということで、美術館側もいろんなメニューを示せて、それがこう使えるということを今後進めていけばいいかなというふうに思う。ほかに意見はあるか。
委員	今の話題とは少しずれるが、パブリックアートの中の彫刻のいわゆる裸婦像の是非について、美術館ではどのように考えているか。
事務局	一般の方から美術館に対して、裸婦像についての意見はある。現状、美術館に上がってくる美術の森というエリアの道沿いにも裸婦像がいくつも並んでいるが、美術館の所蔵ではないので、現時点では美術館として具体的に動いていることはない。全国的な視点で言うと今、色々話題にはなっている。価値観の変容、現代意識というものに照らし合わせた時に、裸婦像ばかりが目につくのはどうなのかということがある。ただ、作品を撤去しても、移転先がないから廃棄するという点についても問題になる。著作権や作者の意向などを尊重していくと簡単には撤去や移動はしづらいということもやはり話題になっている。
会長	裸婦像については、これからまた考えていく一つのきっかけなのかなと思う。ほかに意見はあるか。
委員	各委員の意見の中に、友の会の特典、魅力的な特典をと記載があるが、これまで割引という形である。ただ、友の会に加入している方々は割引も大切かもしれないが、それよりもちょっとした特別感を欲しがっていると私は思っている。例えば、せっかくカフェミュージアムがあるから、そことコラボして、友の会の会員の方たちは特別に、お茶を飲みながらでもいいから、学芸員の方のお話を聞ける機会があるとか。ただ予算の関係もあるので、なるべくこの施設を使ったものなど、無理のない範囲で何とか工夫していただけたらよい。やはり友の会に入るといえるのは、もともとこの美術館に興味のある方ということ、せっかく友の会に入ったからにはという形で来られるということだ。美術館に足を運んでもらうというのは、学生の方のみならず、一般の市民の方にとっても大切なことというふうに思っている。
委員	裾野を広げていくということで、街なかミュージアム等でアウトリーチをされることが書かれていたが、ここに対して、もっと関わりの多様性というか、人数を増やすというよりも、種類の多さみたいなところを作れたらいいのかなと考えている。例えば、Z世代がつくる美術館の展示会と一緒にやるとか。美術展示を企画するみたいな体験は面白いのかなと思う。子供でもいいが、レプリカもたくさん持っているということなので、例えば黒崎市民ギャラリーの空いている期間を使って、子供たちが学芸員疑似体験や、館長が子供に一日美術

	館館長だとか言ってタスキをかけてやる。それが友の会の特典になるかどうか分からないが、そういう雰囲気を作ってはどうか。企画自体を新しいものをいろいろやるのではなくて、今ある力を利用して、いろんな人、小学生、Z世代、そういう人たちと関わるような企画というのは必要かなと。それが一つ裾野を広げるような感じになるのかな。もしくはその裾野を広げるだけではだめで、その裾野を広げた後に美術館に来てもらわないといけないから、そこはもう少し、ベクトルをつけるような企画展が必要かなと。レプリカに触れようみたいな階段を1段作る作業があるのかなと。そこと2段階のイメージができて広がっていけると、少しずつ広がるのかなと思う。基本的には美術館に人が来てほしいなと思うのと、僕らみたいに美術に詳しくない人でも、面白そうとか、やってみたくとか、見てみたいと思える場所になればいいと思う。来館の多様性というか、来館の多目的ということも今後作っていければ良いと思う。
会長	どうしても、数というのが一つの大きな力になるため、数に行ってしまうところはある。しかし、ただ数が来ればいいというのではなく、様々な方々が体験して、その多様性の中から何か生まれることもあると思う。
委員	これまでの話を踏まえて、オンライン・ミュージアム・ツアーというのは、児童・生徒を対象に議論が進んでいったと思うが社会福祉の観点、いわゆる市民それから、弱者という言葉は適当ではないが、足を運びたくても美術館に来られない方、けどとても美術に関心がある方もいる。もちろん現物を見てダイレクトに感動するとか圧倒されるというところは大事だが、例えば、学校に行きたくても行けない子どもたちや発達障害で、こういう空間が苦手な方、それから場が変わることが苦手な方、その方たちが、今デジタルコンテンツを使って美術品を見られるというのはとても価値があると思う。今展示されている彫刻の三沢さんのあのライオンの像を拡大してみた時のノミ跡とか、その裏側のこれが何の木でできているのかというところはデジタルならではのところ。そういった意味で、教育だけの視点ではなくて広げて市民・社会福祉という視点であれば、オンライン・ミュージアム・ツアーやデジタルコンテンツの使い方が少し広がるのではないかなと感じた。それから評価の視点としてもそうだが、来場者が主な評価基準になりがちだが、ホームページを一般の方がどれだけ閲覧したかということは当然データが取れる。そういう評価軸も必要ではないかと思った。それから今、障害の分野で主に話したつもりはなく、例えばうちの両親は絵も音楽会も好きだけど、やはり移動支援が必要になってくる。ヘルパーがいないと、美術館まで来ることができない。家族にもお願いできない。そういう方たちが美術に生涯関わり続けるには、もちろん現物の良さを十分に承知した上で、デジタルの活用というのは新しい評価軸、概念として必要になってくると思う。
会長	本物の素晴らしさと同時に、デジタルも今素晴らしい技術を持っている。行きたくてもいけない方もたくさんいる。そういった方々を社会包摂ではないが、どのようにインクルージョンしていくのかということも含みながら、美術館というのはあるのかなと感じた。
委員	広報の部分についてだが、SNS、美術館のホームページ含めて、いろんな取

	り組みをしていて、きちんと成果を出して、素晴らしいと思っている。今後も研究をして、取り組んでいくと思うが、来場者数の増加を図っていくという意味では、予算等の問題等限りあると思うが、インバウンドをどう取り込んでいくかというのは、ぜひ研究してほしいと思うし、国内の部分で言うと、特にシニアである。こういったシニアの方により来ていただける、仕掛けという部分は本当に重要なポイントと思うので、今後すぐに成果を出せるかという、難しい分があると思うが、ぜひ研究して取り組んでいただきたい。
委員	私はラジオを大体午前中聞くと、8月に入ってそこで初めて、この夏休み企画の中島佑太展が、北九州市立美術館で開催しているというのを聞いた。今年初めて北九州市立美術館という声がラジオから聞こえてきた。今までもそういうコマーシャルはしていたのか？
事務局	基本的には実行委員会に入っている新聞社と連携して、広告枠は事業枠という形で、新聞社が事業部として持っている枠を利用させていただいている。多分回数的には買った広告枠よりかなり少ないかと思う。ただ、昨年度の大観展は、そういった新聞、LOVEFM、テレQなどが広告共催に入っていたため、CMやニュース等で広報活動してくれたため、おそらく去年の4月の大観展や、コレクション展は、かなり広報宣伝が行き届いていたと思う。中島展に関しては毎日新聞社だけのものになっているので、その事業枠の中で流せる範囲という形で行っている。
委員	予算もあると思うが、子供たちが休み期間中には、家で親と一緒にラジオを聞いていると思うので、そういう機会を増やしてもらえると、たくさん美術館に足を運んでいただけるのではないかなと思った。
委員	美術館もアンケートを取り、来館者の情報を得ていると説明を受けたが、先ほど話題になっていたデジタルはもう欠かせないと思う。デジタルを入口に本物を見たくなくて、来館したというのが想像できるストーリーだと思う。それが事実かどうかは立証しないといけないし、それが来館者の情報であるため、来館された方の声を大事にしていかなければならない。今日、私は13時頃に美術館に来たが、多分、一番暑い時間帯だったと思う。その中でも小さいお子さんを連れのお母さんがかなり多くいて、なぜこのお母さんたちはこの小さいお子さんを13時に連れてきたのか、何か理由があるのではないかと考えて、そういったところを広げていけたら一番いいなと思っている。多分、美術館が涼しいからとか、長い時間ここで過ごせるからとか、もしかしたら誕生日だったとか、いろんな理由があると思うので、そこが間違いない理由を事業に反映していけたら、ネットで見た方が来館するという動機になってくるのではないかと考える。 アンケートはかなり取っているようなので、ぜひそれを深掘りしていただき、もし項目が足りないのであれば見直していくことも必要だと思う。やはり実際の来館者が一番答えを持っているはずなので、この声を拾っていくこと。また、それを事業にどうやって反映していけるか。来館者がなぜ来館したのかという部分を深掘りしていけば、ちょっと違う道が広がっていくのではないだろうか。

委員	既に様々な教育普及事業をしており、私が提案できることは多くないが、北九州市は広く、様々なミュージアムがたくさんあるので、市内のミュージアムを家族で回ってみるだとか、市内のいろんなところに行ってみようと思える連携や、あるいは美術館の建物が素晴らしいので、不定期でも建物に着目して美術館を巡る建築ツアーをやってみたり、夜の時間にビジネスマンに向けてVTSをやってみたりしてはどうか。 学校の教員立場からすると、借用できるツールがあれば使い手が良いと思っていて、大きなレプリカとかでなくても、美術館にある作品のアートカードのようなものでも楽しいかなと思った。そして、美術の先生、図工の先生へのアプローチもすごく大事だが、人数は多くないと思うので、初任者研修や10年研修等の教員研修の枠を利用して来てもらい、学校の行事で来るときに行こうとか、こういう教育支援の仕組みがあるということを知ってもらう機会があってもいいのではないかと考える。学校行事などで連れてくる場合、引率が教員1人ということは、生徒が大勢いる場合はあまりないと思うし、科目にとらわれず、他の教員へのアプローチがあってもいいなと感じている。 最後に、年報を見ていてボランティアの方の勉強会が非常に熱心に行われているようだが、美術館に来た時になかなかお見受けする機会がない。活動状況を伺いたい。
事務局	美術館のボランティアは「めるく」というボランティアチームである。活動状況も含めて説明させていただくと、当館は、日本で初めて美術ボランティアを導入したという歴史があり、開館に合わせて、アメリカの美術館の事例をもとにして、ボランティア制度を導入し以来、絶えることなくこれまで続けてきたものである。改修工事中は一度活動を休止してはいるが、現在に至っている。 具体的には、鑑賞サポートを毎週土曜日に行っており、13時半からコレクション展示室の入り口に集まって、そこで対話型の作品鑑賞を行っていくということを、現在続けている。それから、新聞の切り抜きなどの資料整理なども手伝っていただいている。特に、現在の状況では、企画展示室で、中島佑太展を開催しているが、美術館ボランティア「めるく」の非常に献身的な協力によって、会場の運営が支えられており、お客さんに対する体験型ワークショップのサポートなどをしていただいている。顔の知れた付き合いの長いメンバーであり、スタッフとしても安心して接することができるし、いわゆる有償のスタッフとはまた違った意味で、愛着もあるし、一緒に活動させていただいているという次第である。
委員	これまでの話を聞き、美術館に対する要望がすごく多く、スタッフの方がこれを全部こなしていくキャパがあるのだろうかと心配になった。どれぐらいの方が実際に活動しているか人数はよく分からないから、一概には言えないが、ミュージアム・ツアーをして、研究をして、作品の保護をして、それから普段の活動があって、お客さん対応があって、今度は工事が入ってとか大変だなと思う。一人の方がいくつも役をこなしているのかなと思った。 それから、ミュージアム・ツアーはとてもいいことだと思うが、子どもたちだけでなく、保護者の方が見てくれると保護者を巻き込めるかなと思う。子供

	たちを連れてくるのは保護者だから、記憶が新しいうちに。そこで思ったのは今問題になっている貧困と体験の問題である。テレビの一方的なニュースだが、映画を観たことない子供たちを連れてお母さんが NP0 の支援で映画を観に行くというもの。子供たちがすごい感激をしていた。ぜひ、北九州市が美術館に子供を連れてきてくれたら嬉しいなと思う。 ワークショップ、それからいろんなことを通じて最終的には本物を見てもらいたいなと思うので、やはりそこに帰ってくるのは北九州市の市としての姿勢だと思う。子どもたちにどれだけの教育をサービスできるかというところ、そこがとても大事な気がする。経験値はやはり大きいと思う。貧困によって体験ができない子供達、なかなか来られない人たちに、福祉施設などでも見られたらとても素晴らしいなと思う。とにかく本物を見てもらいたいと思っている。本物を見るということ、貧困と体験の問題、それから美術館のスタッフのキャパが無理になってないかという問題、この3つを考える。
会長	誰が聞いても美術館に対して、これだけの要望というか、トラックで例えると過積載のように、重すぎるのではないかという話だが、美術館というのは様々なものを担っているというのも確かであり、その中にはできないこともある。しかし、皆さんからの意見は、どれも非常に貴重である。その中で、どのようなことができるのか、何をしたらいいのか、どこを重視するのかいろんな問題があると思う。例えば、デジタルなのか実物なのかと、これも本来真逆のものを一緒に求められるようなところもあるし、人数なのか質なのか体験なのかとか、本当にいろいろあると思う。そのような中で、美術館というのは多くのものが期待されている非常に重要な施設だと思う。そういったものをこれからどのようにやっていくのか。皆さんの双肩に様々なものが申し掛かるわけだが、これを委員の皆さんの意見、知恵をもらい、さらに可能性というものを深めていくということが大切だと考える。 それでは、事務局から説明のあった評価結果について、承認してよろしいか。 (異議なし) 北九州市立美術館運営評価については、協議会として事務局案を承認する。 これで議事を終了する。
館長	本日は長時間にわたり貴重なご意見をいただき、感謝申し上げます。 それぞれの意見に思うところはあるが、美術館が昨年50周年を迎えたということで、この先の50年を美術館はどのようにしていくべきか、どのような活動をしていく必要があるかということを考えている。恐らく当館に限らず、美術館というものの、特に公立美術館を取り巻く状況は、大変厳しいものであり、地域社会にとって本当に必要な施設にならなければ、50年後の未来はないだろうと考える。そういう意味で美術館に来館する方だけではなく、美術館に来ない人、あるいは来られない人を含めて、美術館の利用者として、どのように美術館が関わっていくのかということは、大変重要な点であり、それに関わる様々な意見が今日あったと思う。一点取り上げると、美術館社会教育施設として、一人もとりこぼさない、取り残さないというつまり、高齢者施設の方、あるいは不登校の子どもでもであるとか、病院から出られないような子供さん

	とか、あるいは障害のある方、それから美術館行きたくない人というものもあると思うが、そういった方も美術館の利用者として、どのように美術館が、美術と市民を結んでいくのかというのは、これからデジタル化も含めてだが、様々なツールや方法を使って模索していく、挑戦していくことが大事だと、今日あらためて話を聞いて思った。
--	---